

衛門ト云人石千ノ屋敷ノ門ト云フ其時門番ノ者見居タルニ、一火圍地へ墜ルトヒトシク、雲降り來テ火圍ハ其中ニ入りテ空ニ昇レリ、其後ニ獸殘リ居タルヲ、門番六尺棒ニテ打タルニ、獸走ニゲ門續ノ長屋ニユキ、又ソノ次ノ長屋ニ走込シテ、ソレニ住メル者有合フ者ニテ抛打ニ爲タレバ、獸其男ノ頬ヲカキサキ逃失タリ、因テ毒氣ニ中リタルガ、此男ハ其マ、打臥タリト、又始メ雷落タルトキ、カノ獸六七モ有タルト覺ヘシト、門番人云ケルガ、猫ヨリ大キク、拂林狗ノ如クニシテ、鼠色ニテ、腹白シト、震墮ノ門柱三本ニ爪痕アリ、此事ヲ聞キ、行人群集シテ常々靜ナル袋町モ、忽一時ノ喧噪ヲ爲シトナリ、其屋敷ハ同姓勢州ガ隣ニテ、僅ニ隔リタル故、雷落シ頃ハ別テ雨強ク、門内敷石ノ上ニ水タッヘタルニ、火光映ジテ門内一面ニ火圍飛走カト見エシニ、激聲モ烈シカリシカバ、番士三人不覺ウツ伏ニナリ、外向ニ居シ者ハ顔ニ物ノ中ル如ク覺ヘ、半時計ハ心地悪クアリタリト、勢州ノ家人物語セリ、

## 〔駿國雜志 五十一〕雷獸

傳云、益頭郡花澤村高草山に雷獸と云獸あり、生温柔にして、よく晝寢し、覺るといへども眼見えざるが如し、雷鳴暴雨の日、雲に乗り、空中を飛行し、誤て落る時は、木を擘き人を害ふ、其猛勢當るべからず、其形猫の如く、鼬に類せり、總身の毛は亂生して、薄赤く黒みを帯び、腹より股の邊りうす黄色の毛あり、髭はうす黒に栗色の毛交り、眞黒の斑ありて長く、眼は圓にして尖く、耳は少く立て、鼠に似たり、爪は尖りて其先裏に曲り、尾は殊に長く、四足の指前四、後に水かきの指一あり、頭より尾に到る長さ二尺餘、尾其半を過ぐ、是を撫れば甚臭氣あり、此獸聲なきにや、終に鳴を聞者なし、文化年中、狩人某火炮を以てうち獲る事あり云々、又云、雷獸は不二山及七郡の高山秀嶺にあり、悉く大ならず、

## 〔枕苑日涉三〕驅雷